

( 続紙 1 )

|  |                         |    |            |
|--|-------------------------|----|------------|
| 京都大学   | 博士 (教育学)                | 氏名 | 藤本 (野口) 素子 |
| 論文題目   | 表情表出による情動調整の特性に関する実証的検討 |    |            |
| <p>(論文内容の要旨)</p> <p>情動 (emotion) を調整する心理機能は、人の適応的行動を促進する重要な働きをもつ。本論文では、表情表出による快、不快の情動調整に関する5つの研究を行い、調整方略がおよぼすさまざまな影響を個人内、個人間で検討し、総合考察を行った。</p> <p>第1章では、まず表情表出による情動調整を中心に、情動調整の定義について述べ、これまでの実験研究から得られた知見をまとめた。情動調整の心理機能については、従来、不快な情動経験に対する「認知的再評価」と「表出抑制」の効果比較を中心に研究がすすめられてきた。表情表出に関わる情動調整研究においても、これまでの研究は主に不快な情動喚起場面における表出抑制の効果の検証に集中しており、表情誇張や快情動の調整に関する研究は少ない。また、表情表出による情動調整は社会的場面で行われることが多いが、表出の受け手に与える影響についてもほとんど検討が行われていない。そこで本研究では、(1) 表出抑制と表情誇張の影響を比較する、(2) 不快情動と快情動の情動調整を比較する、(3) 表情表出の調整が受け手に及ぼす影響を対人相互作用場面での調整も含めて検討する、という3つの観点から研究を進めた。</p> <p>第2章では、表情表出による情動調整の日常経験に関する調査結果をまとめた。大学生162名に対して、怒り、悲しみ、喜びの情動経験に関して、表情による表出抑制および表出誇張を行った経験の自由記述を求め、情動生起因、調整相手、調整動機の観点から結果を整理した。怒りは悲しみや喜びよりも表出抑制されることが多く、怒りの表出抑制、喜びの表出誇張は向社会的動機により行われることが多いことが示された。</p> <p>第3章では、快、不快情動を喚起する映像の視聴時における、表情表出による情動調整 (抑制、誇張) を行う条件と自然表出条件 (統制条件) での情動経験を調べ、さらに視聴する映像に関する記憶課題を行って情動調整の影響について検討した。その結果、不快映像の視聴時の表出誇張で不快情動がより強く喚起され、快映像の視聴時の表出抑制で快情動の喚起が抑制されることが示された。また、記憶課題の結果では、不快映像に対する表出誇張で記憶成績が低下する傾向がみられ、快映像に対する表出抑制で記憶成績が低下した。(本章の一部は感情心理学誌に掲載。)</p> <p>第4章では、表情表出による情動調整が受け手の情動経験や対人印象判断に及ぼす影響を調べた。快、不快映像聴取時に自然表出している表情映像と、感じた情動とは逆の表情を表出している表情映像 (不一致表出) を刺激として実験を行い、自然表出と不一致表出における表出者の情動および対人印象を検討した。その結果、受け手に与える情動経験や対人印象は表出の真偽に関わらず多様であることが示された。(本章の一部は対人社会心理学研究誌に掲載。)</p> <p>第5章では、2者の会話場面において、一方の側 (調整者) の表情表出による情動調整 (抑制、誇張) が、受け手 (実験参加者) の表出行動や対人印象、発話に及ぼす影響を調べた。2者が共有する不快な情動経験について、10分間の会話を行い、その間の2者の表情を撮影して分析したところ、表出誇張条件において受け手の快情動表出が多く、発話が増え、調整者に対する親密感が強いことが示された。</p> <p>(本章の一部は感情心理学誌に掲載。)</p> <p>第6章では、第2章から第5章までの研究結果をまとめ、本研究で得られた知見に基づき表情表出による情動調整の特徴について考察し、今後の課題を論じた。</p> |                         |    |            |

(論文審査の結果の要旨)

情動調整 (emotion regulation) とは、喜怒哀楽といった自然に喚起されるさまざまな感情状態を何らかの方略を用いることでその質や強度を変化させることであり、人間のよきありかた (well-being) を支える重要な心理機能である。近年、情動調整に関する研究は、感情心理学、臨床心理学、認知心理学、生理心理学、社会心理学など、多くの心理学分野に跨る学際的研究テーマとして取り上げられ、とくに欧米の研究者を中心に、1990年代以後、研究が蓄積されてきた。

情動調整に関するこれまでの研究の多くは、本論文の第1章にまとめられているように、「否応なしに喚起される、怒りや悲しみといった感情をどのように抑制し、平静な状態を回復できるか」という、不快な情動経験の緩和に焦点をあてて進められている。そのため、本論文で取り上げている、快情動の情動調整や、表出の(抑制ではなく)誇張が情動調整におよぼす影響については、まだほとんど検討されていない。不快情動だけでなく、快情動の表出も、時と場合によっては抑制する必要があるのではないか。また、自己のうちにある感情を明確に他者に伝えるために、時には不快感情を表す表情でも誇張する必要があるのではないか。こうした著者の問題意識は、日本という文化的環境における情動調整を考えるうえで、重要な意味をもつ。以下、主要な研究が報告されている第3章と第5章を中心に審査結果を述べる。

第3章では、情動喚起映像の視聴時における表情表出の調整という実験状況を設定し、快情動喚起条件と不快情動喚起条件における、表出抑制と表出誇張の効果を検討している。表情抑制と表情誇張については、表情表出の調整を行わない自然表出条件との比較によって効果を分析した。その結果、不快映像の視聴時の表出誇張で不快情動がより強く喚起され、表出を抑制しても不快情動が弱くなることはなかった。一方、快映像の視聴時の表出誇張では快情動の喚起が強まることはなく、逆に表出抑制によって、快情動は抑制されることが示された。このように、快、不快映像に対する表情誇張、表情抑制による情動調整が、快、不快経験に対して異なる影響を示すことは、これまで報告されていない新しい知見である。その心理メカニズムに関して今後さらなる検討が望まれる。また、記憶課題については、不快映像に対する表出誇張で記憶成績が低下する傾向がみられたのに対し、快映像では表出抑制で記憶成績が低下した。快、不快情動喚起映像の記憶が、表出誇張と表出抑制によって異なる影響を受けることも、本研究で明らかになった新しい知見である。この結果については、表出誇張、表出抑制に必要な認知的エフォートの差異で考察されているが、今後さらにこの説を裏付ける根拠の提示が望まれる。

情動調整に関する従来の研究のほとんどは、情動を調整する当事者自身の内的状態に関する検討に限られているため、本論文の第5章に記載されている、2者の対話状況での情動調整に関する検討は、実証研究として希少である。この研究では、不快な情動経験を話題にして、2者の一方(調整者)が表出抑制、表出誇張のいずれかで会話をおこない、実験協力者である受け手の表情、発話量、調整者に対する対人印象を分析した。その結果、表出誇張条件では、抑制条件よりも受け手の快表情が多く、発話量が会話の後半で増加し、調整者に対する親密感も強いことが明らかになった。また、受け手の側に、各調整方略に応じた表情の同期が生じることも示された。さらに、2者間の会話内容のテキスト情報を提示して、第3者に印象評価をもとめたところ、表出誇張条件では抑制条件よりも、会話内容が親しみやすく感情豊かであると評価され、表出抑制条件では誇張条件よりも会話内容が客観的で理性的と評価されることが分かった。すなわち、調整者の表情の抑制、誇張という操作は、受け手の表情表出の

様相のみならず、発話量や発話内容にも影響を及ぼすことが実証的に示されたといえる。このことは、表情表出による情動調整が2者の相互作用場面において重要な機能をもつことを意味しており、今後の情動調整研究における1つの方向性を示唆するものといえる。

本論文の審査においては、情動調整が記憶に及ぼす影響に関して、そのプロセスの分析と考察が十分でないこと、また不快情動として怒りと悲しみを用いているが情動調整の影響も異なることから、個別の情動として分析すべきであること、結果の分析手法にさらに改善の余地があることなどが指摘された。しかしこれらの課題は、今後の研究によって補われうるものであり、膨大な映像データと関連資料の丹念な分析を通して本論文で明らかにされた新たな知見の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成26年6月3日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。